たんぽぽではこの部屋でお産をする。「時間を費やしてお産に関する説明をしています」と宮津さん（右）。病棟婦長で助産師の北荒晶代さん（左）は「宮津さんはここで生まれた子どものご家族を全員覚えている。すごいことです」と感嘆する

医療ジャーナリスト

伊藤隼也が行く！

ニッポンの医療現場 第52回

病院内の助産所

昔ながらの出産スタイルが“お産難民”を救う

助産所とは、助産師がお産の手助けをする場所だ。家族で新しい命を迎えられる、妊婦が産み方を選択できるなどの理由で、助産所での出産を希望する妊婦も少なくないという。今回は静岡県浜松市にある病院内に開設した助産所を訪問、現状や課題を取材した。

転載・二次使用禁止

お産に関われるのは医師と助産師だけ

かつてお産といえば、家庭や助産所で産婆や助産師が赤ん坊を取り上げたものだった。医学の進歩と共に病院で産むのが一般的になったが、近年は少子化の影響などでお産をやめる病院が増え、産婦人科医も減少。この問題を解決する切り札として、助産所が再び注目を集め始めている。

聖隷三方原病院（静岡県浜松市）は、今から5年ほど前に院内助産所「たんぽぽ」を作った。開院までのいきさつをよく知る総看護部長の吉村浩美さんは、その理由を次のように話す。

「当院の医療圏でも産科医と産む場所の不足で、お産難民。が深刻化してくることが予測されました。そんななか、当院の産婦人科医複数が退職してしまったのです。このままだと今まで通りお産を受け入れられません。産婦人科医の負担を減らすためにも正常なお産は助産師に任せようと、助産所たんぽぽが開院したのです」

お産難民（出産難民）とは、近隣に出産施設がない、あるいは予約がいっぱいなどの理由で、希望する地域や出産施設での出産がかなわず、行き場を失った妊婦の状況を示す言葉だ。

日本の法律では、医師と助産師だけがお産を手伝えると定められている。妊婦が健康で胎児が健やかに育っている正常なお産や妊婦健診であれば、助産師だけで対応が可能だ。

現在、たんぽぽでは5人の助産師がお産の手助けをしている。開院から1年間のお産数は139件。今は平均で年100～150件ほどある。これは同病院での出産数の2割ほどだ。

今回訪ねたたんぽぽは、とても病院内とは思えない、家庭的な雰囲気だ。妊婦がお産をする個室は3つ。いずれも畳敷きで、ふとんや小さなちゃぶ台などがある。「畳の部屋で、ふとんに横になってお産をされています。ご主人や子どもたちが手を握ったり、さすったり、声をかけたり……そんななかでの出産です」（たんぽぽのスタッフで、助産師の宮津しのぶさん）

院内にある柱には、お産を終えた家族の写真が貼られている。家族の笑顔はどれも、出産という大きな仕事をみんなで協力してやり遂げた充実感と、新しい家族を迎えた喜びに満ちあふれているように見える。

「たんぽぽで産む場合、この助産師が最初の妊婦健診から出産後の産後ケアまで一貫して関わります。これは主観ですが、妊婦さんの満足度はとても高い。リピーターも多く、2、3人目もここで産みたいと言ってくれます」（吉村さん）

産科の分娩台による分娩よりも、助産所のような家庭的な雰囲気で産みたい。そう願う妊婦も少なくない。しかし、そうしたニーズに応えるほど助産所は増えていない。それはなぜか。

最も大きい課題は、病院や産婦人科医の協力が得られないという点だ。

助産所開設に必要なのは病院と医師の後押し

お産には、多かれ少なかれリスクが伴う。その万が一を早期に発見し、素早く対応することが、妊婦や生まれてくる子の救命につながる。しかし、助産師には医師と同じ医療行為は認められていない。リスクがあるからという理由で、病院や産婦人科医は、助産師が主体になる助産所の開設にあまり積極的ではない。

同院がたんぽぽを開設できたのは、助産師主体のお産をやりたいという強いモチベーションをもった助産師と、それを応援し、正常なお産を助産師に任すことに賛成する産婦人科医がいたからだ。

「ここでは、医師の診察が必要なケース、産科で産むほうが安全だと判断されるケースなど、産婦人科学会や日本助産師会のお産のガイドラインを参考に、独自の基準を作って、それを守っています」（宮津さん）

また、同じフロアに産婦人科があるので、突然の異常事態になったときに、医師がお産に関わることができる。これまで医師が関わった例は少なく、いずれも大ごとにはならなかったという。たんぽぽを見守る産婦人科医の一人、宇津正二医師は言う。

「最初は、すべての出産に立ち会うつもりでした。でも、助産師の働きぶりを見たら、僕はここにいなくて、必要なときに呼ばれたら来るだけでいいと思うようになった。最近は、産科に健康な妊婦さんがいると、たんぽぽで産めばいいのに、と思うくらいです」

この日、妊婦健診の帰りにたんぽぽに寄った妊婦とその夫は、こう話す。

「夫の職場関係の先輩が、たんぽぽで出産して良かったと聞いて、ここで産むことにしました。助産師さんが時間をかけて、具体的にお産に必要なことを教えてくれるので、とても助かります。それにここは病院なので、安心ですね」

新聞やテレビからは、産婦人科医不足で、地方で産む場所がないというニュースが聞こえて久しい。だが、本当に地域で子どもを産み育てるには、単に産婦人科医がいて、産む場所があればよいわけではない。

今は、母親だけでなく、共に働く夫婦が子育てを行うのが基本。それを社会がシームレスに支援する少子化時代の新たな出産・子育て政策を実施しないと、この国に未来はないだろう。

助産所の中央にある柱には、ここで生まれた子と家族の写真がびっしり飾られている

1カ月後に出産を控えた夫婦に助産師が心構えを話す

※宝島社新書『ボケない「食事術」の作り方』（伊藤隼也著）好評発売中！

いとう・しゅんや●医療ジャーナリスト・写真家。国内外問わずさまざまな医療現場を精力的に取材し、患者中心の医療実現のため活動中。テレビ・雑誌・書籍など、多数のメディアでより良い医療のあり方を追求・発信し続けている。http://shunya-ito.tv Twitter=@itoshunya

写真／SHUNYA ITO© 取材協力／山内リカ 協力／聖隷三方原病院